

藤田さん吉野川市の印象いかがでしょう。

藤田 やっぱり、大阪京都と住んで、田舎やなと思うことも正直ありますね。エレベーター、エスカレーター全然見かけないとか(笑)

市長 市役所はエレベーターあるけど、確かにエスカレーターはないな。

藤田 大阪とか京都にいた時って田舎に移り住むのってちょっと憧れるけど、排他的というか怖いイメージもあって、よそ者みたいな扱いだったらどうしようとか、地域おこし協力隊としてこちらに来る際も不安だったんです。

市長 溶け込めるかどうかっていうのがね。

藤田 そうですね。実際、来てみたらすごい皆さんウエルカムな雰囲気、和紙会館っていう特殊な仕事柄のせいか仕事やりたいたいから私も来ましたという方が他にも結構いらしたりして、お話を聞いてたら移住者の方や同じ心境だなど思える人も多かったんで、支え合えたりとか。あとは地域の人が一人暮らし大変だろうというので、大量の野菜をくれたり、そういう面でも助けていただいたり心配することなかったなと安心しています。

市長 田舎のお礼っていうのは皆さん野菜とかですかね。

藤田 すごくありがたいです。

市長 同僚には芸術大学出身の子もいますよ。

藤田 多いですね。私の同期の子にも同じ大学の人がいたりとか、私の先輩にも



▲イベント取材時の撮影を行う和泉隊員

和泉 そうですね。11年間行政という組織の中で働いていたんですが、自分のやりたいことをやらないままでもいいのかなっていうのは自分の中でずっとモヤモヤしていたので、今はチャレンジという意味でも自分の理想に近づくために頑張っていきたいと思っています。

市長 その中で動画に興味を持ったということですね。

和泉 そうですね、今はYouTubeなどで編集の勉強をしています。

市長 わかりました。

藤田 普段は和紙会館の現場で原料の染色で色を染めたり、商品の最後の仕上げをしたりしています。まだ、紙を漉く段階までは職人さんの仕事なので、なかなかそこまでは至ってないんですが、日々色々な仕事を教えていただいています。入社2カ月経った時に東京の出張に突然抜擢されまして、実際に販売するハガキを150

同じ美術大学とか他の美術大学から来た人も多くて。美術大学じゃなくても、職人しながら絵を描いているような人もいたりとか。

市長 お客さんは外国人の方ももちろん増えだしましたね。

藤田 毎日のように見かけますね。今日も中国の方とヨーロッパ系の方を見かけました。見ない日はないですね。

市長 アワガミ国際ミニプリント展ってね、何気にすごいイベントで、外国の方がこぞって応募してくるんですよ。

藤田 初めて聞くような国もありました。私が大学時代、阿波和紙を知ったのもアワガミ国際ミニプリント展でした。

市長 前年度に大賞を取った方が私の大学で教えてくださった先生で、その時に阿波和紙っていうのを知ったんです。

市長 阿波和紙から募集を知ったということなんです。

藤田 「こういう働き方あるけど、どう？」みたいなのを提案していただいて、そこで調べてみたのが最初ですね。

市長 社会人1年目ですもんね。

藤田 もう毎日が新しいことの連続で、働くってこんな感じなのかと思いつつながら(笑)

市長 それでは最後に、地域おこし協力隊として活動する中でやりたいことや、任期後の夢などがありましたら、自由にお話いただけたらと思います。

これからやってみたいことは

藤田 良い場所です。東京に持って行って販売しませんでした。あと、紙漉きの体験ブースで説明をしたり一週間ほど、東京に滞在しました。

市長 青山スクエアでやらせていただきました。事前に先輩方から本をもらって家で読んで準備しました。実際のお客様とのやりとりの中で、気づいたことや現場の営業さんにアドバイスをいただいたことをホテルに帰って、明日はこうしようとかまとめたり、がむしゃらな一週間だったんですけど、それがとても糧になったと思っています。

市長 なるほど。

藤田 今後やりたいことなんですけど、ゆくゆくは流し漉き(和紙の基本的な手漉き方法のひとつ)の伝統工芸士になれたら格好いいなという思いはあります。大学時代から画材が廃盤になったり、高騰したりする状況を見てきて、作家になるのは文化を盛り上げる意味でも大事なこ

とだと思のですが、誰かが作る側にいかなければという気持ちもあり、画材や材料が減っている状況を私の作った紙で少しでも支えていければと思っています。またそれが自分の誇りになれば良いなと思っています。会社の経営理念に「私たちはこの地で日本の伝統文化に関わっていることを誇りに思います」という文章があり、吉野川市で阿波和紙を漉いているっていうことに誇りを持って、それをどういう風に使われているかなどを発信できたらと漠然ではあるんですけど、考えてます。

市長 そういう使命感をもってくれてるといのは素晴らしいですね。阿波和紙はね、非常に素晴らしいコンテンツだと私も思っています。

藤田 インスタも動画とかを載せていまして、結構、海外の方から反応いただけているみたいですね。

市長 この間も大きく取り上げられましたね。

藤田 NHKの方で特集していただきました。

市長 阿波和紙が公文書を保存するのに適しているというね。徳島県がウクライナへ阿波和紙を寄贈したというニュースが大きく報じられましたよね。海外からの評価が高いですからね。

藤田 すごくありがたいです。

市長 今でも和紙会館の近隣の小学生は卒業証書自分で漉いてますよ。

市長 自分で漉いて卒業証書を作るんです。



▲紙漉き体験のワークショップを行う藤田隊員

須藤 今は主に育苗センターでプロックリーの苗を育てて、基本的に水やりしたり、毎日虫がついてないかチェックしたりして、虫がついてたらその苗に消毒したりしています。その他にも休日には、農協の畑の隅っこに僕専用の畝を立ててもらって、今実際に野菜の種をまいて育てています。

市長 何を育てているんですか。

須藤 今は、九条ネギと大根とほうれん草、今日はジャガイモとニンニクを植えています。

市長 なるほど。体で覚えていってる感じやね。その中で今後の展望というのは?

須藤 将来的にはできるだけ農業に関する技術を習得して、まず一人で種から収穫まで自分の力でできるようにすることが目標です。

市長 新規就農者には補助金とかもありますからね。育て方も自然栽培から有機栽培など色々な方法がありますよね。基本的に土いじりというか自然と向き合う

のが好きな感じかな。

須藤 そうですね。

市長 今、やりがいを感じていますか?

須藤 はい、楽しいです。畑行く度に、自分が植えた苗の芽が出てたり成長していると嬉しく感じます。

市長 やりがいを感じてやっているんですね。良いことですね。

和泉 それでは、和泉さんいましようか。

和泉 業務としては、市の公式Instagramが6月に開設されたということもあり、Instagramの投稿を中心にやらせていただいています。あと、イベントの写真を撮ったり、広報誌の「できごと」の記事を書いたりしながら勉強をさせていただいています。まだ、手探りではあるんですが動画編集にも取り組んでいて、市の公式Instagramでもイベントの動画を投稿しています。今の目標は、任期中にもっと市の魅力を動画などを通して発信し、フォロワーを増やすことです。

市長 以前は物作りにも興味があるということでしたが、今後の展望はありますか?

和泉 そうですね、物作りに関しては継続してチャレンジしたいと思っています。ですが、今は動画編集が楽しいので、そこに時間を割きたいなと思っています。将来的には他の仕事をしながら動画編集もやっていくような働き方ができれば良いなと考えてます。

市長 和泉さんは自分のライフスタイルを大切にしながら働いていきたいというイメージがあるのかな。



▲プロックリーの育苗作業を行う須藤隊員

すよね。僕も小学生の時自分で卒業証書を漉きましたね。30年ぐらい前ですけど、ちゃんと記憶に残ってますね。

藤田 皆さんの記憶に残れるというのが、すごい財産だなと思います。

市長 そうですね。

最後に、地域おこし協力隊ってね、都会から来て着任してちょっとイメージと違ったとか、自分はどういうことしたかったけど、来てみたら違ったとか、地元になかなか溶け込めなかったり一定数途中で辞めてしまう人もおるんですよ。せっかく、吉野川市を選んできてくれるから、任期を全うしてもらって、その上で吉野川市で仕事を続けてくれれば一番ありがたいんですけど、皆さんそれぞれの人生なんで、まずはやりたいことや目標持って追求めてもらえたらなと思います。本日はありがとうございました。

一同 ありがとうございます。

